

# 連合艦隊西進す6

北海のラグナロク

横山信義

*Nobuyoshi Yokoyama*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明  
地 図 ・ 図 版 安達裕章  
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	合衆国、起つ	9
第二章	「我はテムズより退かぬ！」	41
第三章	獵犬還らず	93
第四章	最終海戦	141
第五章	去る者、来る者	195
終章		207
あとがき		214

# 北海

ユトランド半島

プレーマーハーフェン

ヴィルヘルムスハーフェン

ウォッシュ湾

アムステルダム

○  
プレーメン

オーステンデ

○ ロッテルダム

ドーバー海峡

○ ダンケルク

○ アントワープ

カレー

○ デュッセルドルフ

○ ボン

フランクフルト

○

50°N



# 英国本土周辺図







# 連合艦隊西進す 6

北海のラグナロク



第一章 合衆国、起つ

## 1

「私はアメリカ合衆国大統領として、国民の皆さんに悲しむべき報告をしなければなりません」

上下院の全議員が参集した議場に、アメリカ合衆国大統領トーマス・E・デューイの声が朗々と響いた。上院議員八二名、下院議員三八九名は、身じろぎもせず聞いていた。

「昨日、一九四四年六月二一日、合衆国海軍の航空母艦『ロング・アイランド』がイタリアのタラント湾で潜水艦の攻撃を受けて沈没し、乗組員九七〇名のうち、四八名が死亡、九七名が重軽傷を負いました。現在のヨーロッパ情勢から判断して、『ロング・アイランド』を沈め、四八名もの尊い命を奪ったのは、ドイツ軍の潜水艦であることは明らかです。ヨーロッパの戦争が始まって以来、我が国は一貫して中立を保つて来ましたが、その我が国に、ドイツは

牙を剥いたのです」

デューイは一旦言葉を切り、議場を見渡した。

反発する者はいないようだ。全員が黙って、自分の演説に耳を傾けている。

「皆さんに思い出していただきたい。当初、ドイツの戦争相手国はポーランド、イギリス、フランスの三国だけでした。ところがドイツは、他国の中立を顧みることなく武力を行使したため、ヨーロッパのほとんどの国を敵に回しました。中立国だけではありません。ドイツは相互不可侵条約を結んでいたソビエト連邦にまで侵攻したのです。ドイツは他国の中立の意思を尊重するつもりも、他国と結んだ条約を守るつもりもない。この事実を、今度は我が合衆国が、貴重な軍艦一隻と、何物にも代え難い人命と引き換えに思い知らされたのです。私は、このような国家とは共存できないと判断しました。

四年前の大統領選挙で、私は国民の皆さんに『あなたの方の子供を戦場に送り込むことは決してない』

と公約しました。今でも、その意志に変わりはありません。ですが、外国が合衆国政府の意志を蹂躪することもあるのです。戦争の方が、あなた方の子供たちのところにやって来るのです。合衆国の行政の最高責任者として、私は独裁国家の野心から、国民を守らなければなりません。

私は合衆国大統領として、議会にドイツとの開戦についての議決を強く希望するものであります」  
デューイはそこで演説を終わり、深々と一礼した。直後、一斉に拍手が起きた。

公約を破ることに對する非難の声は全くない。誰もがデューイの演説に、心を打たれた様子だ。

感極まって、涙を流す議員すら散見された。

デューイは、大きく安堵の息をついた。

満場一致も夢ではない。開戦は、次の大統領選でフランスに働くはずだ——と、腹の底で呟いた。

無論、それを表に出すことはしない。

自分は止むなく戦争に踏み切るのだ、という沈痛

な表情を、最後まで崩さなかった。

大統領が演壇から降り、投票が始まった。

上院は七八対四、下院は三七〇対一九で、ドイツに對する宣戦布告を可決した。

満場一致ではなかったものの、賛成が圧倒的多数を占めている事実には変わりが無い。

一九四四年六月二二日、アメリカ合衆国はドイツ第三帝国と開戦したのだ。

「明日、六月二三日九時より、総統閣下が御自ら重要な放送を行う。作戦行動中の艦を除き、全員が傾聴せよ」

U568艦長オットー・シュトラウス大尉は、フランスの大西洋岸にあるブレストの海軍基地で、ドイツ海軍潜水艦隊司令部の命令を受け取った。

ブレストはフランスの降伏後、ドイツが整備を進めて来た軍港の一つだ。

Uボートが大西洋に直接出撃できるよう、プレス  
トの他、ロリアン、サン・ナゼール等、ビスケー湾  
の沿岸に複数の基地が設けられている。

当初は爆撃を受けても被害を抑えられるよう、頑  
丈なブンカーが建設される予定だったが、イギリ  
スが一九四二年二月に降伏し、爆撃の危険が去った  
ため、通常の軍港として整備されるに留まった。

ところが、日本軍がイギリス軍と共に、インド洋  
紅海を経て地中海にまで侵攻して来ると、ビスケー  
湾岸のUボート基地にも危険が迫った。

このため、Uボートを爆撃から守るためのブンカ  
ーが、急ピッチで建設されているのだ。

建設に伴う騒音——クレーンの動作音、リベット  
を打ち込む音、現場監督と作業員のやり取り等に包  
まれているプレストだが、九時五分前には、Uボ  
ートの乗員も、Uボートの整備や補給に当たる基地要  
員も、ブンカーの建設に携わる作業員も、ラジオの  
前に集まっていた。

放送は、ドイツ国歌の演奏から始まった。

Uボート乗員の待機所でも、ブンカー建設の作業  
現場でも、国歌を斉唱する声が上がった。

現地で雇われた作業員は、ドイツ国歌を口にしよ  
うとはしなかったが、口だけを開閉させて、歌って  
いるように振る舞っていた。

国歌の演奏が終わってから数秒後、独特の抑揚を  
持つ声流れ出した。

「総統閣下だ」

との囁きが、シュトラウスの耳に届いた。

シュトラウス自身は、ヒトラーの顔を間近に見、  
声を直に聞いたことがある。

日本海軍の空母「赤城」「加賀」を撃沈した功績で、  
叙勲されたときだ。

当時は、物腰にも声にも自信がみなぎっていたが、  
今、ラジオを通じて聞く声からは、かつての張り  
失われたように感じられる。

先の大戦に敗北したドイツを不死鳥のように甦

らせ、ヨーロッパ最強の国家に成長させた稀代の政治家も、戦況の悪化によって、精神に重圧を受けているのかもしれない。

「我が忠勇なるドイツ国防軍の兵士諸君、並びにドイツ国民諸君。私は、我が祖国が憂慮すべき事態に直面していることを報告しなければならぬ。昨日、六月二二日、アメリカ合衆国政府は我がドイツ第三帝国と戦争状態に入ったことを、公式に宣言した。イギリス、日本、ソビエト連邦に続いて、アメリカが新たな敵国となったのだ」

待機所の中に、ざわめきが起こった。

Uボートの乗員の中には、顔色を青ざめさせる者もいる。

アメリカの参戦については、以前から噂されていたが、総統の口からはつきり伝えられると、衝撃を隠せないのだろう。

「アメリカは、タラント湾で発生した空母の沈没を、宣戦布告の理由としている。これは、我がドイツに

よる明白なアメリカへの武力攻撃である、と。その主張は、全くだらぬためであり、言いがかりである。これはアメリカの自作自演、もしくはアメリカを戦争に引き込もうとする連合国の謀略であるとか考えられない！」

「そうだそうだ」「総統のおっしゃる通りだ」という声が、待機所のあちこちから上がった。シュトラウスの部下の声も混じっていたように思えた。

「アメリカは以前から、我がドイツに対する敵対行動を取っていた。イギリスと日本だけではなく、ソ連にまで武器を供与し、我が国防軍の精鋭を苦しめ、あるいは死に至らしめた。イタリアにおいてもバドリオ政府を支援し、ムッソリーニの政府を苦しめた。事実上、参戦しているも同然だったのだ。我が国はアメリカの挑発行為にも隠忍自重して来たが、同国が正式に宣戦を布告した以上、遠慮は要らない。今後、アメリカは我がドイツの敵国であり、アメリカ国籍を持つ全ての者が、ドイツ国防軍の攻

撃対象である。私は今ここに宣言する。不遜なるアメリカに、自分たちがどれほど愚かしい振る舞いをしたのか思い知らせてやる、と！」

ヒトラーの演説は、そこで終わった。

ラジオのスピーカーからは、喊声と「ジーク・ハイル！」「ハイル・ヒトラー！」といった大勢の叫び声が伝わって来る。

放送は、ベルリンの国会議事堂からの中継だ。参加している国家社会主義ドイツ労働者党の黨員が、歓呼の声を送っているのであろう。

「アメリカを敵に回すのか……」

シュトラウスと共に総統の演説を聴いていたフリードリヒ・ヴェーラー大尉が呻くように言った。

U568の僚艦U566の艦長だ。第七九潜水戦隊の中で、一番のベテランでもある。昨今の戦況が厳しいものであることも分かっている。

それだけに、ドイツの前途に対して暗澹たる思いを抱いたようだ。

「総統閣下がおっしゃったことは、間違っていないでしょう」

シュトラウスは言った。階級は同じ大尉だが、ヴェーラーの方が先任であり、経験が豊かであるため上級者に対する話し方になっている。

「今年に入ってから、我がドイツ海軍は、イタリア近海では作戦行動を行っていません。Uボートが活動したのは、ジブラルタルとモロッコ沿岸、イギリス本土の西岸のみです。タラント湾における空母の沈没は、総統閣下がおっしゃったように、アメリカの自作自演、もしくは連合軍による謀略だと考えられます」

「アメリカは、そのようなことを問題にはしない」  
ブレストを訪れていた潜水艦隊の作戦参謀ヴァルター・ベルツ中佐が、首を左右に振った。

「かの国は、長い間参戦の機会をうかがっていた。好機を得た以上、かの国が意志を翻すことはない」  
「アメリカの空母を沈めた潜水艦が我が国のもので

はない証拠を提示したとしても、ですか？」

「アメリカは、『そのようなものは、ドイツのつち上げだ』と言い張るだけだろうな」

「それは、正義とは言いかねるのでは……」

「アメリカは正義の国じゃない。あの国の支配層も、正義の味方ではない。体面上、正義の仮面を着けてはいるが、実像はマキャベリストの集団だよ」  
(有無を言わず、か)

腹の底で、シウトラウスは呟いた。

世界を支配するのは、「力は正義なり」の法則だ。力さえあれば、真実と虚偽をそっくり入れ替えることもできるのだ。

アメリカは、その姿勢を貫くつもりなのだろう。

もつとも、それはナチスが政権を握って以来、ドイツが周辺諸国に行つて来たことでもある。同じ事をされても、文句を言える立場ではない。

「我々は、今後どのように動けばよろしいですか？ 御命令とあれば、ニューヨークやフィラデルフィア

の沖で通商破壊戦を実施して御覧にいきますが」

ヴェーラーの問いに、ベルツは答えた。

「海軍総司令部でも、アメリカ参戦後の戦略はまだ定まっていないが、基本方針としては、連合軍に大陸反攻の足場を与えぬということになるはずだ」

## 2

「推進機音探知。方位九五度、距離四〇(四〇〇〇メートル)」

伊号第二四潜水艦の発令所に、水測室からの報告が上げられた。

潜水艦長花房博志中佐は潜望鏡を回し、方位九五度に向けた。

艦の現在位置は、テムズ河口の東方六〇哩だ。

ドイツの占領下に置かれているベルギーの要港アントワープとテムズ河口の、ほぼ中間に当たる。

すぐには、目標は視界に入つて来ない。

花房は、一旦潜望鏡を下ろした。

「距離三〇」

「早いな」

新たな報告を受け、花房は呟いた。

最初の報告からの経過時間は一分四〇秒。音源の速度は二〇ノット前後となる。

英本土に駐留するドイツ軍部隊に、補給物資を運ぶ輸送船だと当たりを付けていたが、輸送船がそれほどの速度を出すとは考え難い。

「深さ五〇。無音潜航」

花房は、航海長海野守弘大尉に命じた。

敵が伊二四を発見し、こちらに急行している可能性を考慮したのだ。

発令所の周囲に水音が響く。潜望鏡深度の一五メートルを保っていた艦が、沈降を開始する。

「深さ二〇……三〇……」

深度計の数値を読み上げる声が、花房の耳に届く。深さ五〇メートルまで潜ったところで、伊二四は

動きを停止した。

「艦長より水測。探信音の有無報告せ」

花房は伝声管を通して、水測長の諏訪秀雄兵曹長に命じた。

敵が伊二四を発見し、爆雷攻撃を加えて来るつもりなら、探信音を放って位置を探るはずだ。

「探信音ありません」

数秒後、諏訪が報告を送る。

「敵が、磁探を使っている可能性はないでしょうか？」

海野が言った。

連合軍が磁気探知機を装備した航空機を前線に配備して以来、敵潜水艦の発見率は著しく向上した。

敵潜水艦の撃沈数は大幅に増え、それと反比例して、潜水艦による連合軍艦船の被害は急減した。

対潜戦の様相を大きく変えた画期的な新兵器だが、ドイツの技術水準は、米英と比べても遜色ない。

ドイツも同様の装備を開発しているのではないか、

と海野は考えたようだ。

「敵が磁探によつて本艦の位置を突き止めたのであれば、既に爆雷攻撃を開始しているはずだ」

花房は反論した。

やり取りを交わしている間にも、「敵距離二〇〇」

「敵距離一〇〇」と、水測室からの報告が届く。

敵の針路、速度に変化はない。

二〇ノット前後と思われる速力を保ち、伊二四の頭上に接近する。

「海面に着水音はないか？」

「ありません」

花房の問いに、水測室から応答が返される。

敵は、伊二四の真上を素通りするようだ。

「潜望鏡深度まで浮上」

花房は意を決した。

敵が二〇ノットで航進している以上、こちらの推進機音や海水の排出音を聞きつけられる心配はない。

それよりも、敵の動きを見極めることだ。

「メインタンク、ブロー」

海野が命令し、海水の排出音が響く。

艦が浮上するにつれ、敵艦の推進機音やスクリュ

ー・プロペラが海水を攪拌する音が伝わって来る。

深度計の針が一五メートルを指したところで、伊

二四は動きを止めた。

数秒後、敵艦の推進機音が通過した。

音は、西方に遠ざかってゆく。

殿軍に位置する艦が、伊二四の頭上を抜けたのだ。

「潜望鏡上げ」

を、花房は下令した。

モーター音と共に、潜望鏡がせり上がった。花房

は把手を掴み、アイピースに両目を押し当てた。

敵艦の艦尾が目に入った。伊二四から、急速に遠

ざかってゆく。

「新たな推進機音、方位七五度、距離四〇〇」

水測室から、新たな報告が届いた。

「潜望鏡下ろせ」

「航海、面舵一杯。針路〇度」

花房は、二つの命令を続けざまに発した。

潜望鏡が一旦下ろされ、海野が「面舵一杯。針路

〇度」と縦舵士の遠藤佐吉兵曹長に命じる。

伊二四は、潜航したまま艦首を右に振る。

航進する敵の真横を衝く態勢だ。

「水雷、前部発射管、魚雷発射準備。発射雷数六。

開口角二度。駛走深度二。雷速四九ノット」

花房は、新たな命令を発した。

「駛走深度二ですか？」

水雷長屋良俊作大尉が聞き返した。

攻撃目標として、積み荷を満載した輸送船を想定

していたようだ。駛走深度は五メートル程度が妥当

ではないか、と言いたいのだろう。

「相手は軽巡か駆逐艦の可能性が高い。駛走深度は

浅めに取る」

「分かりました。前部発射管、発射雷数六、開口角

二度、駛走深度二、雷速四九ノット」

花房の応えを受け、屋良は命令を復唱した。

花房は、またび潜望鏡を上げた。

丸く狭い視界の中に、敵の艦影が見えた。

軽巡と駆逐艦を中心とした、小規模な艦隊だ。

軽巡二隻が最前部に位置し、その後方に一〇隻前

後と思われる駆逐艦が続いている。

隊列から外れて、伊二四に向かって来る駆逐艦は

いない。水測室から「探信音感知」の報告もない。

敵は、まっすぐ西方へと向かっている。

「目標、右前方の敵水雷戦隊。外扉開け。発射管注

水」

花房は、潜望鏡を降ろして下令した。

発射管で出番を待っている九五式五三・三センチ

魚雷は、帝国海軍が誇る純粋酸素を動力源とする魚

雷であり、ほとんど航跡を引かない。

最大射程は雷速四九ノットで五〇〇メートル。

炸薬量は四〇〇キロ。水上艦艇が使う九三式六三七

ンチ魚雷と比較しても見劣りしない性能を持つ。

輸送船や駆逐艦に用いるには、少々勿体ない気がする。

だが遣欧艦隊隷下の潜水艦部隊は、大陸欧州から英本土に向かう船は、艦種を問わず撃沈しよう命じられていた。

「外扉よし。発射管一番から六番まで注水よし。一秒後に発射します」

全ての準備が整ったことを、屋良が報告した。

「一〇、九、八」

艦長付の米倉始上等水兵が秒読みを開始した。

花房は今一度潜望鏡を上げ、敵が依然直進していることを確認した。

「三、二、一、ゼロ！」

「発射！」

米倉が秒読みを終えるや、花房は下令した。

艦首から、圧搾空気を排出する鋭い音が伝わった。

六本の五三・三センチ魚雷が二本ずつ、時間差を置いて放たれたのだ。

伊二四が遭遇したのは、ドイツ海軍の第一〇輸送隊だった。

フランスから接收した軽巡洋艦、駆逐艦を改装した高速輸送艦で編成されており、A、Bの二隊に分かれてイギリス本土に向かっている。

イギリス本土のドイツ軍部隊に対する本国からの補給は、六月六日以降、専ら空輸に頼っていたが、航空機で運べる武器は小銃、機関銃、軽迫撃砲等、比較的重量の軽いものに限られていた。

イギリス本土西岸に上陸した連合軍が、多数の戦車、装甲車、火砲を擁していることを考えると、小火器だけの対抗は困難であり、戦車や装甲車の輸送が不可欠とされた。

といて、それらを運べる輸送船は、速力が遅い上に防御力が乏しく、連合軍の潜水艦に容易く撃沈される。

このためドイツは、既存の軽巡、駆逐艦を改造した高速輸送艦によって、戦車、装甲車等の装甲車輛や、榴弾砲、加農砲といった重火器の輸送を試みたのだ。

軽巡、駆逐艦は、本来は物資輸送のために作られた艦ではなく、積載量が小さい。

だがドイツは、突貫工事によって、これらの艦から後部の兵装を撤去すると共に、上甲板に補強工事を実施し、軽巡であれば一四〇トン、駆逐艦であれば七〇トンの積載力を持たせた。

第一〇輸送隊は、これらの高速輸送艦に、六号重戦車ティーガーII、装甲兵員輸送車S d K f z 251、一〇五ミリ榴弾砲、八八ミリ対戦車砲等を載せ、二〇ノットの速力で、テムズ河口を目指していた。

伊二四が発射した六本の九五式五三・三センチ魚雷は、後方に位置していたB部隊——ティーガーIIと一〇五ミリ榴弾砲、八八ミリ対戦車砲を運んで

いた部隊に、真横から襲いかかったのだ。

「魚雷航走音、左一〇〇度！」

B部隊の先頭を行く輸送艦「GST6」——機雷敷設型巡洋艦「エミール・ベルタン」を改装した高速輸送艦の艦橋に報告が飛び込むや、

「全艦、最大戦速！」

「艦長より機関長、両舷前進全速！」

「左舷機銃座、魚雷を撃て！」

B部隊の指揮を執る「GST6」艦長ローマン・ハウプト中佐は、続けざまに三つの命令を発した。

後甲板にティーガーII二輛を積んでいるため、船足は若干鈍っているが、機関出力を振り絞れば、

二八ノットという俊足ぶりを發揮できる。

速度性能を活かして、魚雷を回避するのだ。

輸送艦改装後も残された三七ミリ連装機銃、一

三・二ミリ連装機銃が旋回し、海面に狙いを定める。機関の鼓動が高まり、艦が加速される。

「各艦、増速します！」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。